「家族・婚姻」研究文献選集

■全15巻／別巻1
〈新装版〉

湯沢 雍彦 監修

あらゆる角度から戦前の「家族」を追求し、現代を考える。

クレス出版

戦前篇

有賀喜左衛門著「日本家族制度と小作制度」口絵より

再刊にあたって

〝「家族・婚姻」研究文献選集〟は、人類社会において永遠のテーマであり、現在一般の関心も高い「家族」の問題を、それに係わる婚姻、親子、婦人、離婚等を含めて、社会学・人類学・教育社会学・法制史学・民俗学等あらゆる分野から研究できるように精選し、集成したものです。

社会の変化とともに、「家族」の在り方も変わり続けています。現代の家族研究をしていくうえでも、過去の家族制度とその移り変わり等を踏まえ、広い視野で「家族」の研究をしていくことが必要であると思われます。

「戦前篇」は、明治から昭和二十年（終戦）以前に出版された単行本（翻訳は除く）より、研究者の主要著書を数多く取り入れ、現在入手が困難な研究文献、家族研究には必要な文献を選び刊行したものです。

平成元年に出版した本選集は、たくさんの方にご購入いただき、長く品切れとなっていました。その後も再刊を望まれる方が多く、今回刊行にあたり、別冊解題を各文献巻末に付けて〈新装版〉として、全一六巻一括販売とさせていただきました。

なお、「家族・婚姻」に関する論文を集成した新たな企画を、老川寛先生の監修で進めており、平成一二年より刊行の予定ですので、御期待いただきたいと思います。

クレス出版

監修にあたって
――古典に学ぶもの

東洋英和女学院大学教授
湯沢　雍彦

最近三十年間における日本の家族研究の進展には、まことにめざましいものがある。その前の二十年間に比べれば、研究業績の量は数倍にも達しよう。社会経済条件の急激な変化が家族の危機を招来したことのほかに、新しい家族の在り方を学問的に探ろうとする若い研究者の増加も、これを支えている。

しかしその歩みは、すべて手堅く、堅実とはいい難い。簡単粗雑な小調査の紹介や、マスコミで少し評判になったことだけを論ずるお手軽なものが、「研究」の名の下にまかり通っていることが多くはないだろうか。出版界の自転車操業に乗せられて、軽薄短小な書き物を溢れさせているのではなかろうか。

翻って私どもが学生時代に指示された参考文献を思い起こすと、そのいずれもが、なんと大きく重かったことか。洋書・和書を問わず、まずそのボリュームに圧倒された思い出が懐かしい。しかもその著者は、必ず一人であった。まれに複数の手に成ったものも、マルクス＝エンゲルスのように完全に一体化されていた。そして、読み進めば、十年あるいは三十年の思考研究の成果であり、執念の結晶であることを思い知らされるものであった。要するに、研究者の生涯の熱情を注ぎ込んだ一書こそ、本物の研究書なのである。

現代に生きる私たちは、むろん現代に関心を持つべきである。しかし、考察の深さと、方法の吟味において、つねにフィードバックして、古典に学ぶこともまた必要である。ここに復刻された一六冊は、その期待に十分応えてくれるものとなるはずである。

家族論の宝庫

淑徳大学教授
森岡　清美

第二次大戦後、日本の家族はさまざまな側面で大きな変化を遂げた。しかし、戦前にも家族は変化を見せたのであって、とくに明治末から大正初期にかけて、都市を中心とする家族の変化が識者の関心を惹いたようである。この点に気づいた私は、社会学のみならず、法学・法制史・経済史の書物をあさって、これらが興味深い社会学的考察を加えていることを知り、大いに学ぶところがあった。

今回、明治期から第二次大戦終結前まで、約半世紀の間に刊行され、今では入手困難になった貴重な書物を集めて、「家族・婚姻」研究文献選集　全一五巻別巻一巻が出ることになった。もし、一五年前にこのような文献選集が出版されておれば、私も文献を探す苦労をあれほどせずにすんだはずである。

初期の書物には進化論など欧米の学説の影響を受けた議論が顕著であるが、昭和期に入ると日本の家や婚姻に関する実地の調査に基づいた実証的な研究書が主になってくる。この選集に収録された文献にザッと目を通すだけでも、家族研究における研究方法の推移と専門分化の歩みを大観することができるのである。

収録された文献は、いずれも刊行当時評判になった書物である。刊行以来、古いものは百年、新しいものでも四十五年の歳月がたっている。歳月に耐えた価値とその現代的な評価を、別冊に収録された解題が明らかにしてくれるであろう。

この選集は、家族研究者にとって家族論の宝庫といってもよいものである。大学図書館はもちろん、家族研究を射程に含む研究所・研究室、および公私立図書館に、少なくとも一セット備えることをお勧めしたい。

『推薦の言葉』
精選された古典

東京経済大学教授
利谷　信義

一九七〇年代以降、社会構造と家族関係が全般的な変化を示そうとしている。戦後日本社会の発展に適合した家族法にたいし、夫婦同氏の問題など多くの疑問が提出されているのも、その表われであろう。しかし、変化の帰着点はまだ不透明であるだけに、家族研究に寄せられる期待は大きい。

このような変動期においては、家族研究においても、比較と歴史の広い視野が要求される。この企画は、これに応えるものである。

ここに復刻される一六巻の書物は、各学問分野における家族研究から精選された古典と言ってよい。まず私たちは、これらによって各分野の戦前における到達水準を知ることができる。読む人は、これらの研究が、他の社会の家族と比較可能なレベルまで理論化されていることに驚くに違いない。著者たちの研究の基礎には、表面に表れていない場合でも、外国の社会と家族に関する洞察がある。それだからこそ、これらの書物は、今日の学説史的検討に耐え、かつ私たちの問題意識をいきいきと刺激してくれる。

またこれらの書物自体、時代によって触発されたものである。これらは、明治憲法の成立期（『隠居論』の初版は明治二十四年）、第一次大戦後の体制再編期　大正デモクラシー期）、中国との戦争期、太平洋戦争期に現れている。著者らの問題意識が時代と切り結んだ結果が、これらの書物に他ならない。そのことは、これらの書物にたいし、その限界を示すとともに、その不朽の歴史的意義を保障している。

かくして私たちは、戦前の家族研究を学際的に把握し、戦後の家族研究を批判的に検討し、将来を展望する地点に立つことができよう。

「家族・婚姻」研究 文献選集 戦前篇

§全15巻／別巻1〈新装版〉

■湯沢　雍彦 監修

① 増補 族制進化論

●有賀長雄著／牧野書房／明治23年4月

社会現象の総体を通論した『社会進化論』、宗教の総体を分析してそれを組成する五大要素を一々細論した『宗教進化論』と三部を成す、族制の事のみを講究した、本研究文献の最も旧き著。

内容：族制発生篇（族制の根本は定婚に在る事／婚礼の起原／婚姻の定確及び妻女の貞操の起原）族制発達篇（姓族、異族相婚、男女買得法、聘財等の起原／官位、財産等を女系に伝える事、女系の尊属其卑属を督制する事等の起原／家長制度、連合家族、及び之に基づく諸習慣の起原／村落社会及び大小氏族の起原、並に日本支那族制の差同／族制の発達に基づく人名沿革、財産所有法の沿革、婦女の身分の沿革）族制盛衰篇（族長政治の起原／戦国時代の族制の状態／儒教に基づく支那日本社会の状態）

（解題：老川　寛）

② 隠居論

●穂積陳重著／穂積奨学財団／大正4年3月

比較法制史、法学、社会学の各側面から老年学をアプローチした先駆的書。家族制度のなかで老人の地位、役割を知るうえの貴重文献。

内容：隠居の起源／隠居の種類／隠居の名称／隠居の年齢／隠居の性質及び要件／隠居の無効及び取消／隠居の効果／隠居の将来（解題：湯沢　雍彦）

③ 子供本位の家庭

●安部磯雄著／実業之日本社／大正6年7月

立憲的国家、平民主義の社会をつくるためには、家庭が立憲的自由平等主義の家庭でなければならないという立場から、子どもの人格を重んじ、子供の権利を認めた「子供本位」の家庭と教育を力説。

内容：実験室としての家庭／国政は家政の反映／子供本位と民本主義／子供の権利／家庭教育と国民教育／夫婦両本位／婦人の威厳／相互的貞操／家庭議会／雇人に対する態度／重要なる社会問題

（解題：田中　弘子）

④ 離婚制度の研究

●穂積重遠著／改造社／大正13年7月

離婚制度に関する諸雑誌に発表した論文を纏めた大著。言うなれば『比較離婚制度論』。

内容：離縁状と縁切寺／縁切寺満徳寺／クリスト教の婚姻非解消主義／イギリス離婚法略史／フランス革命と離婚法／フランス議会に於ける離婚拡張案／西洋諸国の協議離婚制度／知らぬ間の離婚／ロシア革命と婚姻法／ノルウェーの新婚姻法／離婚原因論（民法施行前の離婚原因／判例に現われた離婚原因／夫の姦通／精神病離婚／相対的離婚原因）

（解題：星野　澄子）

⑤ 家族制度と婦人問題

●河田嗣郎著／改造社／大正13年9月

婦人問題は家族制度の問題に関連し、またその逆も関連するという点から、両者に関する解説と論議を併せ収めている。

内容：家族制度の性質と機能／家族制度の起源／家族制度と氏族制度との関係／父権的家長制の家族制度／家長制家族組織の崩壊／家族制度崩潰の気運／女子労働問題／男子の賃金と女子の賃金／女人の性礼拝／女権より人権へ（解題：犬塚　都子）

⑥ 日本家族制度史研究

●砂川寛栄著／中文館書店／大正14年4月

神代から近代までを、創成時代、模倣時代、武家時代、過渡時代、大成時代、改革時代に分け、家の組織・婚姻・婦人の地位・家の存続、親子関係等を詳細に述べる。祖先崇拝や家族各員の福利を考えに入れた小家族制度を理想として提唱したり、男女同権、良妻賢母の教育を奨めるなど傾聴すべき家族制度改良論。

（解題：川崎　末美）

⑦ 家族と婚姻

●戸田貞三著／中文館書店／昭和9年2月

人々の生活要求が増大し、その生活内容が複雑になればなる程、人々は次第に多くの社会関係を構成し、種々の集団に加入する。しかし、内面的生活安定を得られるのは、家庭生活である。筆者が昭和二年以後発表の家族生活に関する諸研究に幾分修正して輯めたもの。

内容：家族の集団的特質／職業世襲の傾向に就て／事実上の婚姻と法律上の婚姻／カトリック教徒と家族生活／夫婦結合分解の傾向に就て／日本の離婚と米国の離婚／自然の人口と人工の人口／日本の家族制度の特質／家族の集団的性質の変遷／家族制度の改造／家族構成（解題：落合恵美子）

⑧ 日本家族制度批判

●玉城　肇著／福田書房／昭和9年12月

明治維新の変革によって、生活様式に及ぼした影響を解明しながら、家族制度の変革を述べ、また家父長、婚姻離婚制度の変革を家族制度関係諸法制の批判を中心に説明。最後に、『明六雑誌』を中心とした婦人論や家族論、福沢諭吉の一夫一婦論、明治文学に現れたる『家』の問題等、「明治時代」に於ける諸家の家族論の批判など、できる限り科学的に、客観的に試みている。

（解題：野崎　衣枝）

⑨ 家族主義の教育

●新見吉治著／育芳社／昭和12年11月

温故知新の史僻から家族制度の歴史を検討し、教育の向うべきところを考究した小篇を輯めたもの。

内容：家族制度論／自由結婚／妻の財産権について／結婚した女子の氏名／松下村塾の学風と孝子木原松桂／国体と家族制度／日本家族制度の特質／相続法改正案と家族主義／家族制度の根本義／頼杏坪先生を憶ぶ／ドイツの国民運動と婦人問題／ドイツに於ける母性の尊重／系図尊重の思想養成／ナチスの重農政治と教育／家族主義の教育と入学難・就職難の打解／中古初期に於ける族制

（解題：酒井はるみ）

⑩ 日本農村社会学原理

●鈴木栄太郎著／時潮社／昭和15年12月

日本農村の社会生活の全面に亘る基礎的事実を科学的方法によって再現し、そこに見られる事象の型や傾向を出来るだけ同一の深度に於いて取扱っている。今日の日本家族研究法の原点。

内容：日本農村社会学／日本農村社会研究法／日本農村の社会構造／農村に於ける家族及び家族本位制／日本農村に於ける社会集団／日本農村に於ける社会関係／自然村の統一性と其社会意識／関心共同権／自然村の社会分化（解題：岡村　益）

⑪ 日本民俗学上より見たる 我国家族制度の研究

●橋浦泰雄著／日本法理研究会／昭和16年9月

民間伝承（一般国民―庶民の間に古くから伝わっている生活事象、習俗或は風俗と言われているもの）を根本資料としている、民俗学から見た家族研究。

内容：家とは何か／竈の意義／カマド及びイヘの消長／竈をめぐる者／親・子の変遷／婚姻／相続・分家・隠居／大家族／群の生活（解題：岡田　照子）

⑫ 結婚と人口

●岡崎文規著／千倉書房／昭和16年11月

政府に於て決定した「結婚の促進」「結婚年令の引下げ」を人口増加の見地から論述。結婚という現象を社会現象として統計学的に観察処理して、品位の高い香りを持ち、特に経済との連関を明白に指摘し、充分な科学的配慮を行なっている。

内容：結婚の研究上の基礎知識／結婚率の変動／結婚の奨励／初婚者の結婚費用／平均結婚年令とその引き下げ／特殊結婚率の地域別とその改善／通婚の地域的範囲／結婚の成立と結婚の届出／血族結婚／結婚と出生との関係（解題：清水　浩昭）

⑬ 白川村の大家族

●江馬三枝子著／三国書房／昭和18年6月

飛騨国大野郡白川村の中切地方は、明治以後、外的な、または内的な矛盾のために崩壊の一路を辿りつつも、とにかく大正年代までは大家族制度を維持していた。とくにその中で、木谷部落を中心としてその民俗と生活を調査して纏めたもの。

内容：木谷部落の成立／大家族と財産／生業と副業／家族員とシンガイ／婚姻習俗／産育習俗／葬送習俗／普通食事と食制／年中行事／衣類その他／住居とその建方

⑭ 日本家族制度と小作制度

●有賀喜左衛門著／河出書房／昭和18年12月

『農村社会の研究』改訂版、特殊日本的な小作制度を明らかにし、小作の起源を近世以前にまで溯り、それと家および同族の制度が各時代の歴史的条件の全体的関連の中でいかに結びついていたかを明確にしている。

内容：家族制度と小作制度／名子の名称／名子の分類／賦役の種類／賦役と物納小作料／賦役と刈分／刈分と検見と定免／賦役の本質／小作の年季

（解題：光吉　利之）

⑮ 家と家族制度

●戸田貞三著／羽田書店／昭和19年8月

戦時下に、我が国の「家」に関する問題を調査研究し述べたものをまとめた書。家の機能に重点を置き、それと国家との関係を述べることに意を用いている。

内容：住居としての家／近親者の集団としての家／家の大いさ／家が小集団となる理由／家の構成員／家の形態／家の連帯性／家の機能の国家的意義／内的安定作用と家／物的生活の保障作用と家／幼少者及び老弱者保護作用と家／徳行助長及び犯罪防止作用と家／祖孫一体化と忠孝一体／家の作用と家族制度／民族的家族制度／我が国の家族制度の特色／家風／現代の社会情勢と家（解題：山田　昌弘）

別 人事慣例全集

●自治館編、発行／明治44年3月

民法中の親族・相続制定前の明治五年より同三十一年までの全国で発生した、出生・縁組・離縁・婚姻・隠居・相続・入籍等の争いを県が国に伺いをたてた記録とその指令集。生きた古習旧慣を無数に見出せる貴重文献、事項索引付。（解題：湯沢　雍彦）

●「家族・婚姻」研究文献選集　戦前篇

全15巻／別巻1〈新装版〉

A5判／上製函入／クロス装
本文クリーム中性紙使用
揃定価本体一五四、〇〇〇円（税別）
平成十一年十一月末日刊行
ISBN4-87733-076-3

●クレス出版好評既刊書●

岡崎文規著作選集　人口と家族

全6巻／清水浩昭監修・解説
大正末期から昭和40年代に至る長い期間、日本を代表する人口学者の一人であり、また人口行政の中心者であった岡崎文規の主要著書・論文のうち、「人口と家族」の視点から編集。結婚、離婚、出産、死亡全般、自殺、他殺など人口動態の幅広い資料。
A5判／総3,060頁／揃定価本体85,000円 ISBN4-87733-011-9

戦前期国勢調査報告集

全19巻／湯沢雍彦監修　財団法人日本統計協会編集協力
大正9年を第一回として、五年毎に調査されている「国勢調査」の戦前分を復刻。全国、府県、市町村別の男女別年齢別の人口、就業状況、配偶関係、住居の種類、世帯の構成等詳細な統計集。日本の家族、地域社会、全国のすぐれた断面図を提供。
B5判／総10,900頁／揃本体376,000円 ISBN4-906330-78-9　**ほか**

社会福祉統計年報

全3巻／厚生省大臣官房統計調査部編　上掛利博解説
厚生省報告例の抜本的改革によって1951年1月から各都道府県から提出されるようになった統計報告をまとめて（各巻の第2編）、それらに解説を付けて（同第1編）、昭和26年度より同34年度まで公刊されたもの。解説の最後には、英文概要も付けられている。
B5判／総2,800頁／揃定価本体90,000円／ ISBN4-87733-059-3

文献選集教育と保護の心理学

全四期48巻別巻1　大泉溥監修・解題　A5判各期約12,000頁
近代日本の教育や社会的保護（社会福祉）にかかわる文献集。
Ⅰ明治大正期　揃本体249,000円 ISBN4-87733-020-8,021-6
Ⅱ昭和戦前戦中期　揃本体245,000円 ISBN4-87733-022-4,023-2
Ⅲ専門雑誌・研究紀要　揃本体250,000円 ISBN4-87733-052-6,053-4
Ⅳ昭和戦後初期　揃本体252,000円 ISBN4-87733-072-0,073-9

祖母・母たちの娘時代

湯沢雍彦編
現在はお年寄りになった女性たちが、半世紀以上昔（つまり戦前）の日本社会の中で、娘時代をどう過ごしてきたかを、ご本人の語りをもとに娘や孫娘たちが記録した22編を生年順に並べた集大成。〈ふつうの人々〉が何を着て何を食べ――庶民生活史の一つの試み。
B6判／252頁／定価本体1,200円 ISBN4-87733-075-5

株式会社クレス出版
〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町14-5　メローナ日本橋
☎03(3808)1821　FAX03(3808)1822　http://www.kress-jp.com/